

平成24年度文部科学省委託事業
「体験活動推進プロジェクト」事業報告書

“ふくしまキッズ” の 教育的効果



普及版

ふくしまキッズ実行委員会

本小冊子は平成24年度文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」事業の報告書として作成されたものを基に、普及版としてふくしまキッズ実行委員会で再編集したものです。

普及版の説明

2011年3月11日、私たちの国、日本は世界史に残る大事故を引き起こしてしまいました。福島第一原発事故です。日本の高度経済成長を支えた原子力発電ですが、この事故が起こるまで、ほとんどの日本人は「原発は必要だ」と思い、どれだけ危険性のあるものなのかについては何も考えず、今から考えれば、電力を浪費してきました。そのツケが今回の事故だったと思います。

その中で、「福島の子どもたちを守ろう」という呼びかけが全国で起こりました。これは同然のことです。原発に賛成か反対かという議論の前に、何の責任もない福島の子どもたちにそのツケを払わせるわけには行きません。国の責任、東京電力の責任を問うことは当然の事ですが、それを声高に叫ぶマスコミにも責任はありますし、我々日本人全員にもこの事故の責任はあるはずです。

そうした考えから、福島の子どもたちの支援のために、「ふくしまキッズ夏期林間学校」を行おうと、福島の子どもを守ろうプログラム実行委員会（現在のふくしまキッズ実行委員会）が組織されました。2011年夏の「ふくしまキッズ夏期林間学校」では、全国の支援者（個人・企業など）から支援金を集め、最終的には518人の児童・生徒が北海道で1人最長35日間の自然体験活動を行いました。

この「ふくしまキッズ」の活動は、単なる避難や保養という後ろ向きの目的ではなく、今回の大事故という大きなマイナスをプラスにできるぐらい、せめてプラマイ0にする教育事業を行い、将来の「復興・福島」を担う人材を育成することを目的としました。そのため、活動の最初から「今やっている活動で目的である子どもたちの育成はできているのか」ということが実行委員会の中でも議論されてきました。そうした中で、平成24年度の文部科学省からの委託事業「体験活動推進プロジェクト」で、“ふくしまキッズ”の教育的効果についての調査を教育支援協会北海道が北海道教育大学の協力で報告書としてまとめることができました。

日本社会において、「ふくしまキッズ」の活動のように子どもたちが一ヶ月以上の自然体験活動を行った事例は過去にないため、このような体験活動の実績調査は存在しません。そうした観点からもこの報告書は貴重なものです。そして、本調査によって「ふくしまキッズ」の活動が子どもたちの成長に大きな力を持つということでした。

ただ、この報告書は専門的な観点からまとめられたため、一般の方が読んでもよくわからないという声もあり、「普及版」として本小冊子を再編集しました。そのため、原本の報告書の表現を一部変更しており、その編集責任は私たちふくしまキッズ実行委員会にあります。再編集をしたこの小冊子の目的は、全国に自然体験活動の価値を発信し、自然体験活動の普及啓発に寄与することです。そして、この報告書の成果を「ふくしまキッズ」の活動に反映し、より良い活動としていく所存です。

なお、調査報告書の原本はNPO法人教育支援協会北海道のHPよりダウンロードすることができますので、詳細をお知りになりたい方は、ぜひそちらをご覧ください。

「ふくしまキッズ」の活動概要

本調査の対象となった活動は、2012（平成24）年7月23日（月）～8月23日（木）の日程で実施された。この期間中に全体で16のコースが設置され、最長で32日間の活動プログラムが展開され、開催場所は福島県（拠点：鮫川村）、北海道（主要拠点：七飯町大沼）、愛媛県（拠点：今治市、西条市）で、本研究では、2011（平成23）年に既に一度実施され、諸条件が比較的整っていると考えられることから、北海道プログラムを研究対象とした。北海道プログラムでは大きく分けて2種類（拠点型・移動型）のコースを設け、その北海道プログラムの詳細は以下の通りである。

北海道プログラム

(1) 流山サマースクールコース（全3コース）

北海道七飯町・大沼流山温泉を拠点とし、広範囲には移動せず、じっくりと生活する拠点型の活動を展開する生活体験中心のコース。2週間というまとまった時間を活用し、「午前中は生活、午後からは遊び、夕方は温泉」という生活リズムを基本とし、長期にわたる合宿活動に慣れていない低学年の子どもたちも健康に過ごすことができるように考慮されたコースである。また、遊びの可能性をより広角的にするため、「お出かけプログラム」と称して道南各地へ出向き、ホームステイを実施した。

■参加者数：209名 ■参加ボランティア数：641名 ■ホームステイ引き受け家庭：19名

(2)全道体験キャンプ（全6コース）

特定の地域に活動拠点を置く「流山サマースクール」とは対照的に、北海道内各地をキャラバン隊のように移動し、北海道の特徴ある風景や産業を体験できるコース。本コースは、福島県から大沼に入り、基本的には2泊3日を大沼で過ごし、その後7泊8日の単位で北海道各地をまわり、再び2泊3日を大沼で過ごした後、福島県へ帰るといったものである。

■参加者数：185名 ■参加ボランティア数：757名 ■ホームステイ引き受け家庭：10名

調査の概要

■調査内容

- ①参加した児童の特性を明らかにするための保護者アンケート
- ②参加した児童の生きる力の変容を測定するための「IKR評定用紙（簡易版）」

■調査方法と対象

- ①調査方法：質問紙を用いた事前・事後調査
- ②調査対象：2012年度ふくしまキッズ夏季林間学校・北海道プログラムの参加者とその保護者

I. 保護者を対象とした調査

ふくしまキッズ・プログラムに参加した児童の保護者を対象とした調査用紙は、参加者の特性を明らかにするために、参加者自身には回答が困難な項目や客観的な視点をもった回答が必要な項目などで構成されており、「震災発生時の住まい」「震災後の避難経験の有無」「避難の理由」「震災時におけるこどもの経験」「震災後の外遊びを制限するような約束事の有無」「震災前後の外遊びの時間の変化」「外遊び時間の減少による子どものストレス」「震災前後における遊ぶときの人数」などの質問内容を含む（フェイスシートを除く）全13項目からなる。

また、調査用紙には、プライバシーに関わるものや震災に関わるデリケートな項目も含まれており、回答者には回答し難い項目があると考えられたため、回答前に、答えにくい質問には回答しなくても構わないという旨を口頭や調査紙の冒頭文で伝えることとした。なお、アンケート調査を行うにあたっての個人情報の取り扱いについては、回収した調査用紙は厳重に管理し、研究目的以外には使用しない旨を口頭および文面で伝え、了解を得た上で調査を実施した。

II. 参加者を対象とした調査

参加者対象アンケートについては全3回の調査を実施した。2回目調査については一部のコースの調査が未実施のため、そのコースを単純集計・考察の対象から除外した。また、3回目調査については、調査方法に不備があったため、一部を考察から除外した。

1回目調査：プログラム初日にその場で回答、回収。

2回目調査：プログラム最終日にその場で回答、回収。

3回目調査：プログラム終了から1ヶ月後にweb上で回答、回収。

■有効回答数

調査（集計）対象の保護者アンケートの有効回答数は344、参加者アンケートの有効回答数は320。

■調査研究担当者

能條 歩（北海道教育大学岩見沢校 教授；研究デザイン・考察・まとめと提言）

田中千帆里（北海道教育大学大学院；調査・集計・統計処理・分析・考察）

山田 亮（北海道教育大学岩見沢校 講師；統計処理アドバイザー）

■生きる力の測定

今回の調査では参加者の生きる力の変容を測定するために「IKR評定用紙」（簡易版）を用いた。

■主な調査方法等について

今回の子どもたちに対する調査では、2001年に生きる力の測定の為に開発された「IKR評定用紙（生きる力）評定用紙」（70項目）の質問項目を、国立青少年教育振興機構が調査の簡便化をはかるために各下位指標を2項目ずつに厳選し完成させたもの（28項目）を使用した。

各項目は「とてもあてはまる」（6点）と「まったくあてはまらない」（1点）を両端とする6段階の間隔尺度として回答を求め、活動開始日の開校式（以下事前）と活動最終日の閉校式（以下事後1）と活動終了日から1ヶ月後（以下事後2）の3回にわたり調査を実施した。なお、「IKR評定用紙」（簡易版）は小学4年生以上の対象者を想定して作成されているため、小学1～3年生の参加者については、大人のスタッフをつけ、質問項目の意味を確認しながら回答してもらうこととした。

■自然に対する態度の変容（自然との共生観尺度）の測定

自然体験プログラムによる教育的な意義をより広い視点で捉えるためには、参加者の生きる力の変容を測定することに加え、自然に対する態度について測定することは重要なことであると考え、IKR評定用紙の下位能力である「自然への関心」の他にも、自然に対する態度の変容をみるための尺度を作成することとした。

尺度を作成するにあたって、日能研他が、自然体験活動が参加者の心理変化に及ぼす影響を捉えることを目的に作成した「自然体験アンケート」（2004）のうち、自然に対する態度に関連する項目（自然への関心・自然観・生命観）を参考にし、自然への親和性や生命観、環境行動性などの自然に対する態度や認識、感性などを測定する項目を抽出した。それらは、自然と人が良い関係を築き、共生していくために必要な項目であると考えたため、自然との共生観尺度という名をつけ、統計学的手法を踏み作成した。

■参加した子ども達のこれまでの自然体験活動の経験

「ふくしまキッズ」の活動に参加した子ども達がこれまで経験してきた自然体験活動の「多い・少ない」を調査し、子ども達の特性を明らかにするために、国立青少年教育振興機構が「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（2010）の中で、幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験（子どもの頃の体験）とそれを通じて得られる資質・能力の関係性を把握し、青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動を推進するために作成した「子どもの頃の各年齢期における体験」の調査内容の中から、「自然体験」「動植物とのかかわり」を参考にした質問項目を調査紙に含めた。

各項目は、各年齢期（小学校に通う前、小学校低学年、小学校高学年）における体験の度合いについて、それぞれ「何度もある」「少しある」「ほとんどない」のいずれか一つを選択してもらい、「何度もある（2点）」「少しある（1点）」「ほとんどない（0点）」を得点化し、その合計得点を個人の「子どもの頃の自然体験」得点とした。

次に、子どもの頃の自然体験得点をもとに、自然体験活動の経験の「多い・少ない」による群分けを行うため、合計得点の平均（M）を算出したところ、18.92点であったため、この値を基に子どもの頃の自然体験得点が19点以上の対象者を「自然体験活動の経験が多い群（N=100）」、18点以下の対象者を「自然体験活動の経験が少ない群（N=113）」として、二群に分類した。

多群 「自然体験活動の経験が多い群（N=100）」

少群 「自然体験活動の経験が少ない群（N=113）」

■統計処理

「幼少期の自然体験活動の経験」などにより、ふくしまキッズ・プログラム参加前の段階で身につけている力に差はあるのかを明らかにするために、事前における「自然体験活動の経験の多寡（多群・少群）」に分類した。その上で、ふくしまキッズ・プログラムの教育的効果を検討するために、プログラムの前後、終了から1ヶ月後における変化を調査した。

その結果、変化が見られた項目については、その変容過程を明らかにするため、多重比較を行った。また、参加した子ども達が持つ「これまでの自然体験活動の経験」や「被災経験」などの特性による効果の変容の違いを明らかにするため、2要因の分散分析（混合計画）を行い、交互作用に有意差が認められた場合は多重比較を行った。

主な調査結果

調査結果①

「ふくしまキッズ」の活動に参加した子ども達の多くは震災時に恐怖体験をしており、日常生活でも野外活動に制限があるなどのストレス下にある。

■ 子どもたちの震災時の経験のなかで最も多かったのは、地震による強い揺れや停電、津波にのまれるなどの「恐怖体験」、次いで友達や先生などの「身近な人との離別」であった。

■ 子どもたちの外遊び時間は平均1日36.8分であり、震災後の外遊びの減少により子どもが強いストレス下にあったと感じている保護者は52%にのぼる。震災前後を比較して「震災後の外遊びの時間が震災前より減った」と感じている保護者が95%を占めている。また、震災前は大人数での集団遊びが多かったが、震災後には集団遊びが減少し、単独での遊びが増加している。

□ プログラムには外遊びや発散系の活動が含まれていることが必要と考えられる。

□ 遊びを計画する際には集団遊びを含めることが効果的と考えられる。

外遊び時間の減少に伴うストレス (n=344)

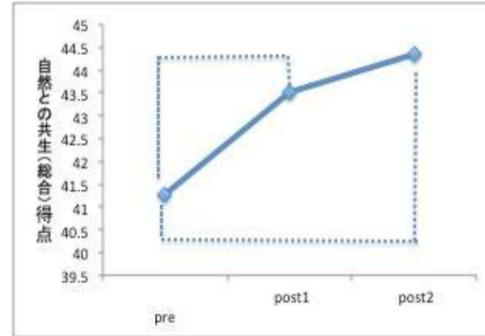


調査結果②

ふくしまキッズに参加することで、生きる力・自然への親和性・生命観・環境行動性などの力が大きく向上する。

■ 生きる力・自然への親和性・生命観・環境行動性は活動後に有意に向上した。ふくしまキッズ・プログラム参加者の特性を考えると、この結果はこれまでの類似の研究よりもプログラムの固有の効果である可能性が高いことを示唆する。

□ 「自然のなかで自然物に直接触れる体験」を取り入れることで、子どもたちに「自然との共生」という視座を提供できる。



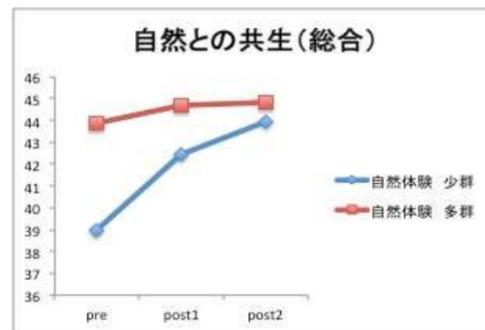
調査結果③

幼少期に自然体験を多くすると生きる力・自然への親和性・生命観・環境行動性などの力が備わる。

■ ふくしまキッズ参加前に幼少期の自然体験活動の経験が多い子ども(右表の赤線)は、生きる力や自然との共生観についてプログラム参加前の時点で既に備えている力が高い。

■ ふくしまキッズ参加前に自然体験活動の少ない子ども(右表の青線)は、生きる力や自然との共生観がプログラム後に大きく向上し、普段の生活に戻った1ヶ月後も維持・向上し続けていた。

□ ふくしまキッズで実施されているような自然体験活動は、参加対象者の発達段階における重要性が高いため、プログラムを構成するにあたっては、「自然の直接体験」を重視したプログラムを構築することが望ましい。



調査結果④

1～2ヶ月程度の間をおいた反復的な自然体験により効果が維持される可能性がある。

■ 効果が見られたものの1ヶ月後まで維持されていなかったものや、向上した力が1ヶ月後には実施前に近い状態にまで戻ってしまう場合もあったことから、外遊びの制限があるなどして、プログラムが実施された環境と普段の生活環境が大きく異なる場合には、効果を持続するための定期的な自然体験活動への参加が必要であると考えられる。

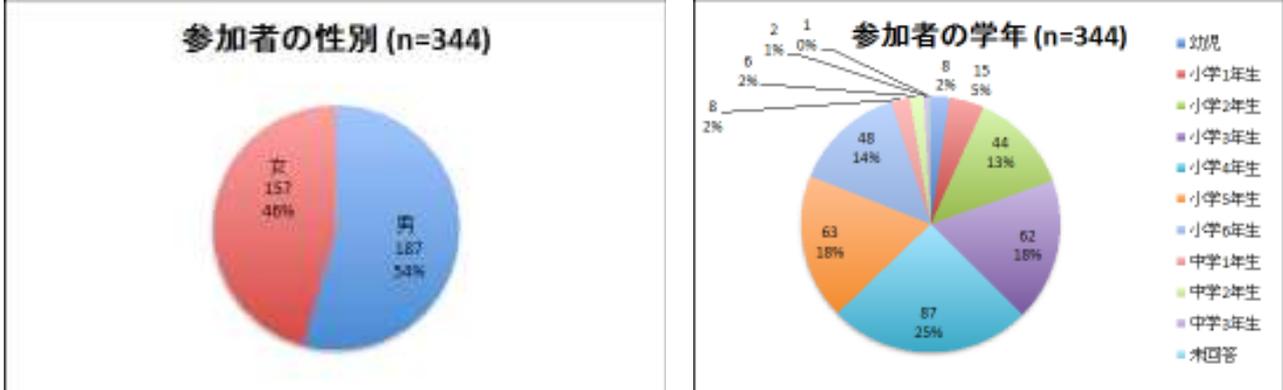
□ 間をおいて複数回参加することで、よりいっそう効果が高まることが考えられるので、可能であれば継続的に参加することが望ましい。

□ プログラム終了後1ヶ月以降に、なんらかの“ふりかえり”が促されるようにすることで、効果の定着や維持が促される可能性がある。

保護者アンケートから見たこと

■保護者アンケートの結果（有効回答数344）

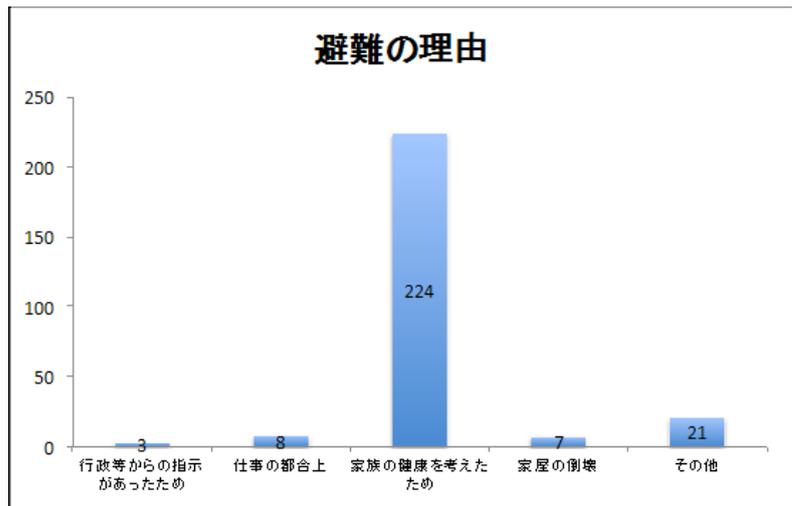
保護者に対するアンケート項目は13あったが、子どもたちの置かれている現状を表すものを以下にその集計結果を掲載する。なお、対象となった子ども達の性別と学年は以下のものである。



質問（3） 【避難の理由】を教えてください（複数回答可）

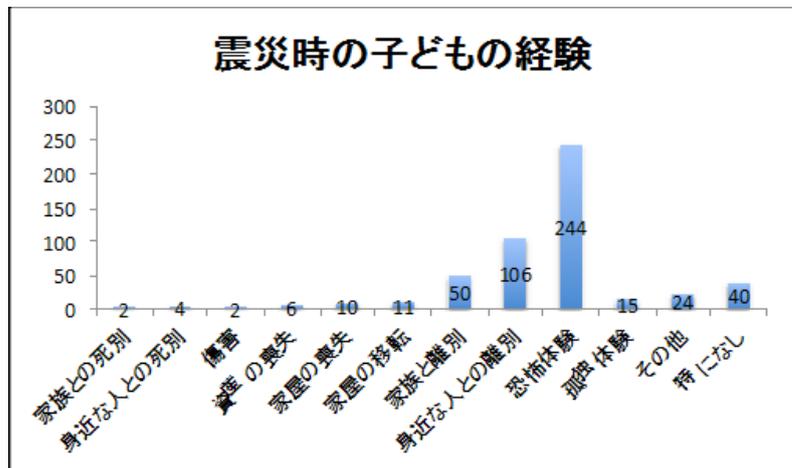
- 参加者のうち70%が避難を経験している。
- 避難を経験している者のうち、県内避難が22%、県外避難が78%である。

「ふくしまキッズ」への参加条件が、現在福島県内在住という条件が定められていることから、震災後県外避難を経験した者は、一度避難をしたものの、福島県内で再び生活を始めていることがわかる。



質問（4） 差し支えなければ、震災時の【お子さまの経験】を教えてください（複数回答可）

- 参加者が震災時にした経験の中で最も多かったのが「恐怖体験」、次いで「身近な人との離別」が多くあげられた。
- なかには、家族や親しい人との死別という過酷な経験をしている子どもたちもいる。



質問（6） 震災後、お子さまが外遊びをする際に、マスクの着用・時間の制限・線量計の持参等の【外遊びを制限するような約束事】を新たに決めましたか。

- 原発事故による影響なども考慮し、子どもが外で遊ぶ際に外遊びを制限するような約束事を決めた家庭がおよそ90%である。震災前に比べて、子どもたちが外で遊びづらい状況に置かれていることがわかる。

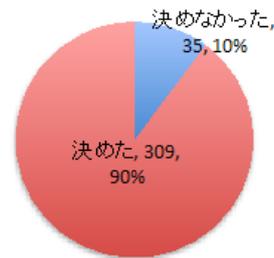
質問（9） 震災前と震災後では【外遊びの時間】に変化はありましたか。

- 外遊びの時間が震災前より減ったと感じている保護者が95%を占める。
- 「強く感じているように思う」「強く感じていたが慣れてしまっているように思う」「やや感じているように思う」「やや感じていたが慣れてしまっているように思う」を合計すると89%の子どもたちが震災、原発事故により何らかのストレスを感じていると保護者は受けとめている。

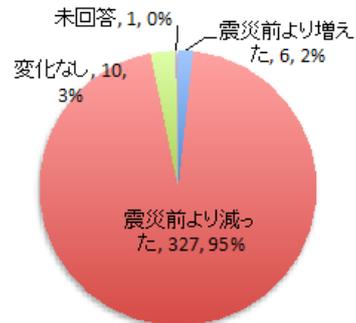
質問（11） 震災前と震災後における【遊ぶときの人数】についてはどうですか。

- 震災前は大人数での集団遊びが多かったが、震災後には集団遊びが減少し、単独での遊びが急増している。

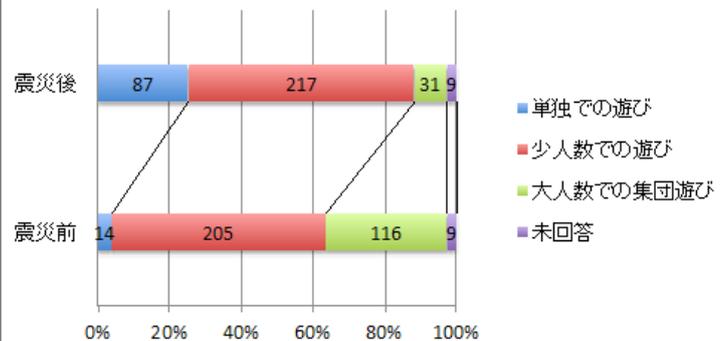
外遊びを制限するような約束事 (n=344)



外遊びの時間の変化 (n=344)



遊ぶときの人数 (n=344)



保護者対象アンケートのまとめ

保護者対象アンケートの単純集計の結果から、ふくしまキッズ・プログラム参加者の特性はおおむね以下のようにまとめられる。

- 参加者の70%が避難を経験しており、そのうち県内避難が21%、県外避難が79%である。
- 参加者が震災時にした経験のなかで最も多かったのは「恐怖体験 (N=244)」、次いで「身近な人との離別 (N=106)」であった。中には家族や親しい人との死別という過酷な経験をしている者もいた。また、震災時に特に被害を受けていないと答えた参加者は40名であった。
- 外遊び時間の減少に対して、92%の子どもたちが何らかのストレスを感じている（もしくは感じていた）と保護者は受け止めている。

「ふくしまキッズ」の教育的効果はどうか

■参加者（子ども）アンケートの結果（有効回答数320）

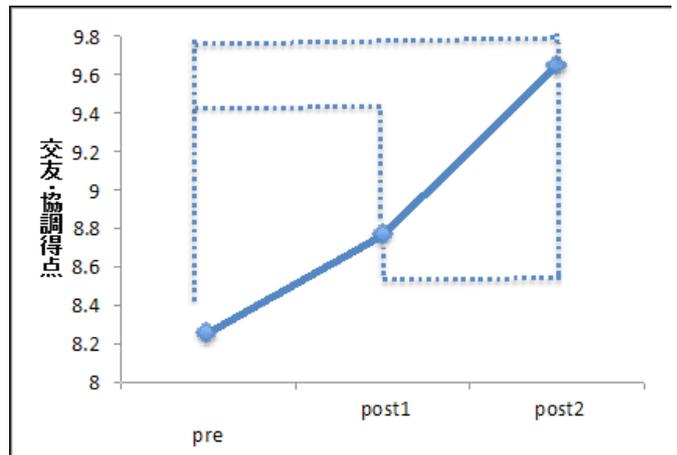
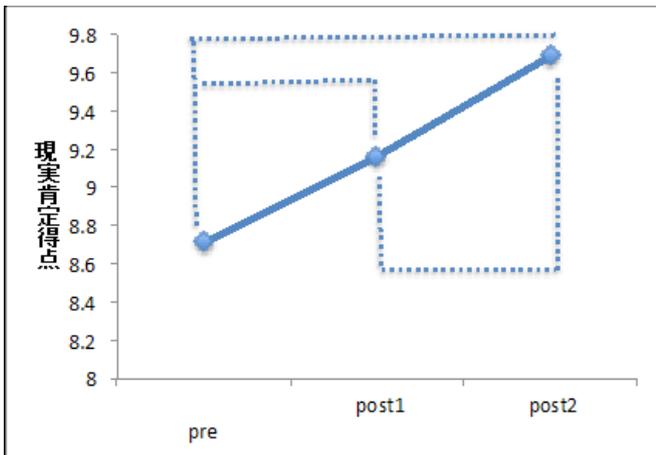
調査の目的である「ふくしまキッズの教育的効果」の検証のため、生きる力・自然への親和性・生命観・環境行動性などの尺度を用い、ふくしまキッズ参加前後での子どもたちの変容（効果）及びその効果がどのように維持されているかについて、生きる力についてはIKR評価紙（簡易版）を、自然への親和性・生命観・環境行動性については新たに「自然との共生観尺度」を作成して検討した。その結果が以下にグラフで示したものである。

グラフの見方

- ①グラフ中の3点は活動初日の事前 (pre)、活動終了後の事後1 (post1)、1ヶ月後の事後2 (post2) を示している。
- ②縦軸が各項目の子ども達の得点で、各グラフの縦軸の数値が異なるのは指標ごとに合計点が違うからである。たとえば、各指標ごとに最高点を百点に換算して、縦軸の数値を揃えて表現することもできるが、そうすると合計点の少ない指標ほど傾きが極端に表現されてしまうため、指標ごとに傾きを見比べて「〇〇の方の傾きが大きいからより変容度が大きい」というような解釈ができなくなるので、そのままの得点で表わした。

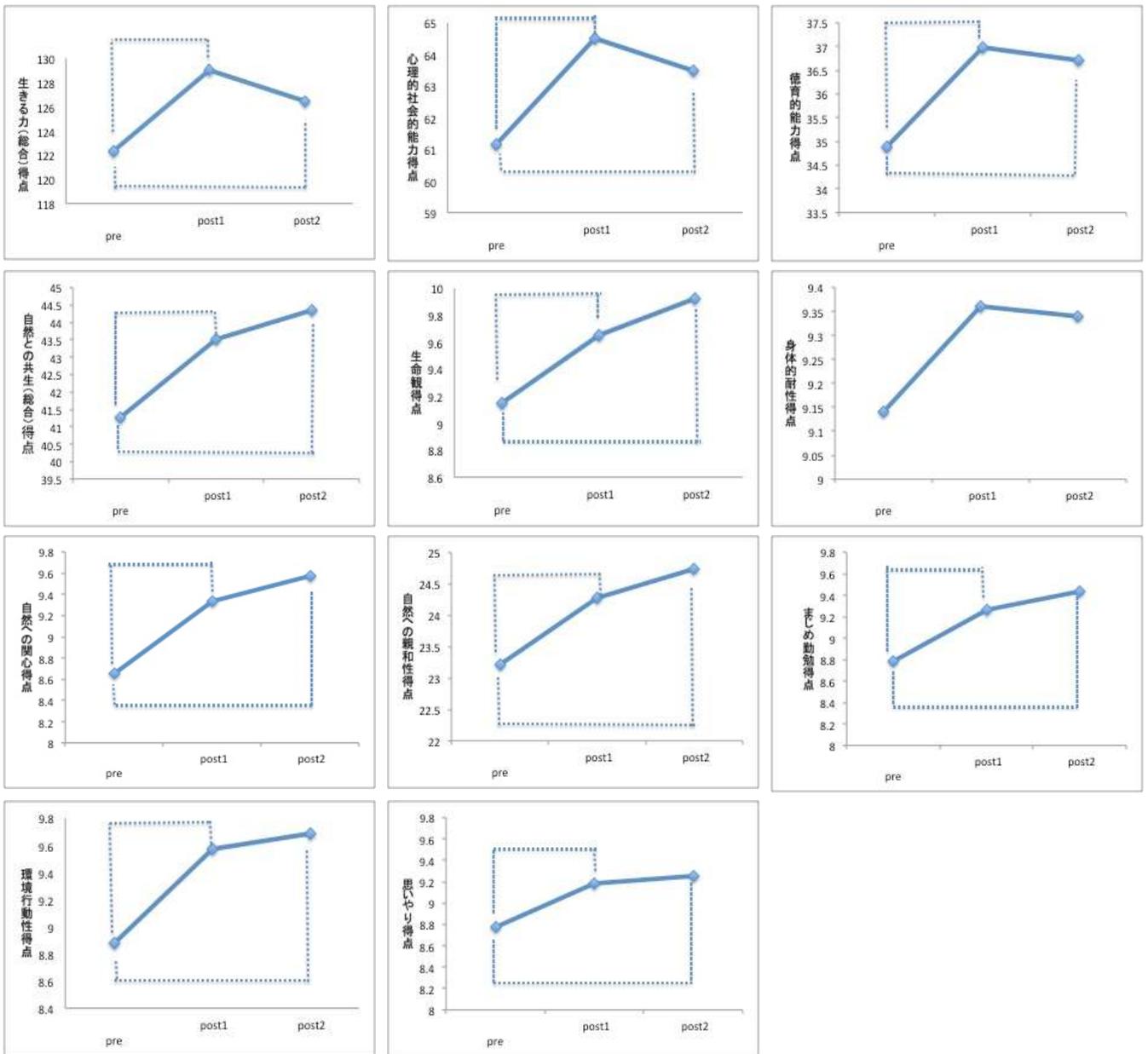
①最も活動の効果があつたと考えられる指標

活動後に有意に向上し、1ヶ月後においてもさらに有意な向上がみられたものが「交友・協調」、「現実肯定」である。



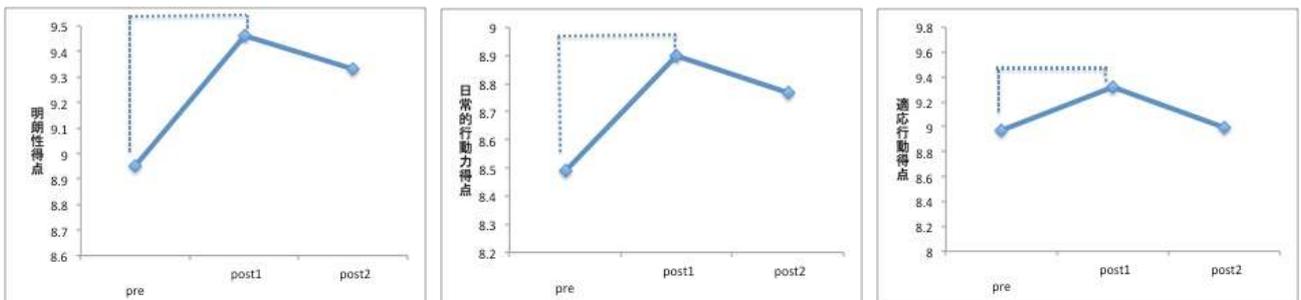
②活動後有意に向上し、1ヶ月後まで維持されていた指標

3回の測定時期を要因とした分散分析の結果、総得点である「生きる力（総合）」、「自然との共生観尺度（総合）」、そして、「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「自然への関心」、「まじめ勤勉」、「思いやり」、「自然への親和性」、「生命観」、「環境行動性」のそれぞれの得点に有意な変化がみられ、多重比較の結果、活動後も有意に向上し、1ヶ月後まで維持されていた。



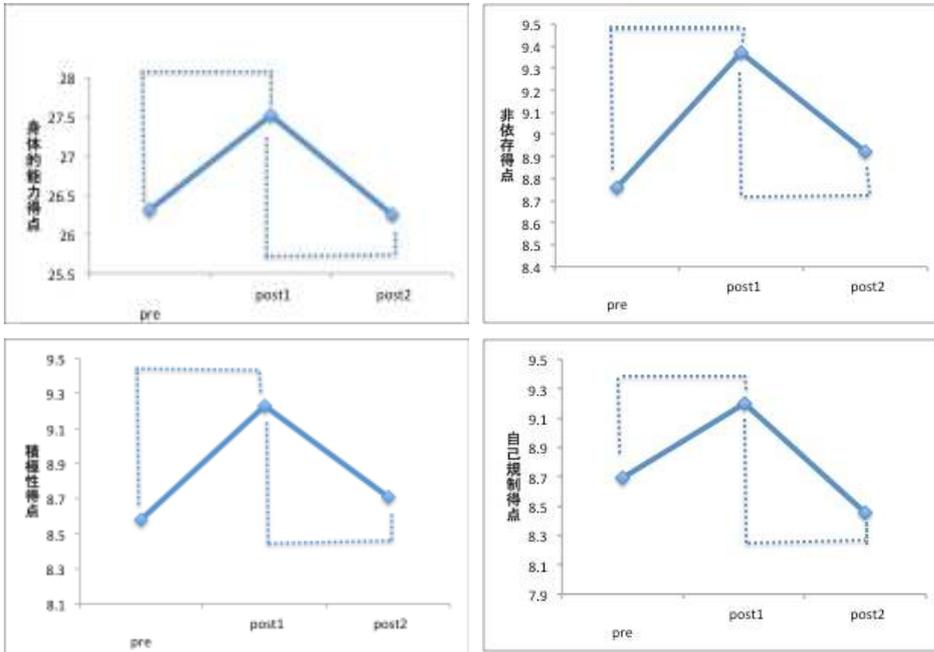
③活動後は有意に向上したが、1ヶ月後まで維持されなかった指標

「明朗性」、「適応行動」、「日常的行動力」にも事前から事後1までは有意な変化がみられ、多重比較の結果、活動直後は有意に向上したが、それは1ヶ月後まで維持されなかった。



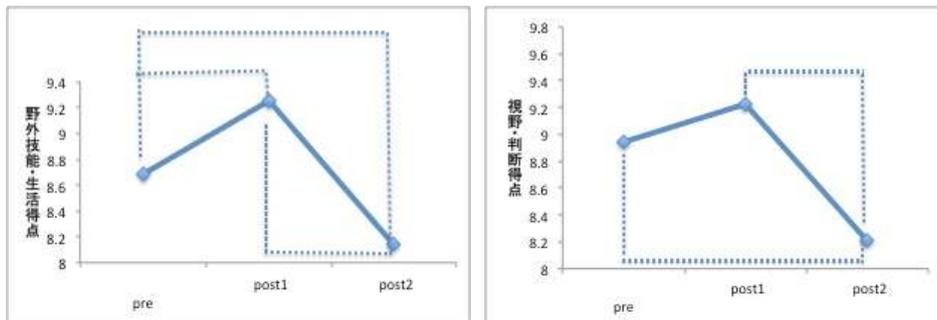
④活動後は有意に向上し、1ヶ月後にはほぼ活動実施前の状態に戻っていた指標

「身体的能力」、「非依存」、「積極性」、「自己規制」のそれぞれの得点に有意な変化がみられ、多重比較の結果、活動直後は有意に向上したが、1ヶ月後には活動実施前と近い状態に戻っていた。



⑤活動の成果があまり見られなかったもの

「野外技能・生活」得点は有意な変化がみられ、多重比較の結果、活動後は有意に向上したものの、1ヶ月後には活動実施前よりも得点が有意に低くなっていた。また、「視野・判断」得点は有意な変化も見られず、多重比較の結果、1ヶ月後には活動実施前よりも得点が有意に低くなっていた。



【全体考察】

- 以上の結果から「生きる力（総合）」「自然との共生観尺度（総合）」「心理的社会的能力」「徳育的能力」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」「自然への親和性」「生命観」「環境行動性」については、活動後に向上し、その1ヶ月後も維持されていたため、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって力が向上し、それは一時的なものではなく、参加した子どもたちが普段の生活に戻ってもその効果は維持されていると考えられる。
- 特に、ふくしまキッズ・プログラムへ参加した子どもたちは震災後の外遊びの時間が震災前より減少したという点や、外遊びを制限するような約束事が増え、外遊びがしづらい状況におかれているという点を考えると、活動参加の前や活動から帰ってきた後に自然体験がほとんどないものと考えられるため、これまでの類似の研究と異なり、本研究の結果がふくしまキッズ・プログラムの影響による効果が比較的強く出ていると考えてよいことを示唆している。
- 「自然への関心」「自然への親和性」「生命観」「環境行動性」などの自然に対する態度や認識に関する全項目の得点が向上した理由としては、プログラム全体の目的を達成するために企画者が力をいれたメインプログラムに、登山や自然探索、木育活動など、自然の中で自然物に直接触れる体験を取り入れることが多かったことが考えられる。そのような活動を通して、自然に対する感性が深まり、自分の住んでいる地域に戻ったあとも、身近な自然に対するものの見方などに変化が生まれ、力が維持されていることも考えられる。
- 「まじめ勤勉」は「いやがらずによく働く」「自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる」の2項目からなっており、これらは親元から離れ自分一人で何でもこなさなければいけない状況に長期間置かれることで、自立心が芽生え、自分のやるべきことや自分の役割に責任をもって取り組む力を身につけることができたためではないかと推察される。
- 「思いやり」は「人のために何かをしてあげるのが好きだ」「人の心の痛みがわかる」の2項目からなっており、これらはふくしまキッズ・プログラムを支えているボランティア、受入れ地域の人々の精神である「福島の子どもたちを守りたい」という強い思いが、共に時間を過ごすなかで子どもたちの心に伝わった結果ではないかと考えられる。自分たちのために一生懸命に準備をし、寝る間も惜しんで活動に取り組んでくれる人々に接し、自分も将来困っている人たちに何かしてあげたいという思いがわいてくるということは、ふくしまキッズ・プログラムならではの効果であり、人間としての大きな成長の一つといえるのではないだろうか。
- 「交友・協調」「現実肯定」得点がプログラム後有意に向上し、1ヶ月後においてもさらに有意な向上がみられていたことから、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって上記の力が向上し、参加者が普段の生活に戻った後も、その効果は向上し続けていると考えられる。「交友・協調」は「多くの人に好かれている」「だれとでも仲よくできる」の2項目、「現実肯定」は「自分のことが大好きである」「だれにでも、あいさつができる」の2項目からなっており、これらの項目が実施後に向上した理由は、ボランティアや受入れ地域の人々及び共に生活する仲間のほとんどが初めて会う仲間であり、その仲間達と長期間にわたる共同生活を送る中で、数々の困難を協力して乗り越えたり、時にはぶつかり合う経験などを通して、日常生活では得ることのできない深い心のつながりを感じることができたためではないかと推察される。見ず知らずの人と最終日には別れを惜し

むような仲間関係になることで、自分自身にも自信が付き、コミュニケーション能力が向上し、福島に戻ってからの日常生活においてもそうしたことが生かされたため、1ヶ月後においてもなお向上し続けていた可能性がある。

- 「明朗性」「適応行動」「日常的行動力」得点が活動後有意に向上したが、それが1ヶ月後まで維持されていなかったことから、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって上記の力からは向上したものの、参加した子どもたちが普段の生活に戻ると効果は少しずつ減少していったと考えられる。
- 「身体的能力」「非依存」「積極性」「自己規制」得点が活動後有意に向上したが、1ヶ月後には実施前と近い状態にまで戻っていたことから、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって上記の力は向上したものの、参加者が普段の生活に戻ると1ヶ月ほどで効果は参加前の状態に戻ってしまうと考えられる。これは、プログラムが実施された環境と普段の生活環境が大きく異なることから、プログラムによって習得した能力を活かす場が不足し、能力が退化していくためと考えられる。そのため、効果を持続するためには、定期的に体験活動のプログラムに参加したり、活動が終了し環境が変化した後にも、活動中に得られたこと、感じたことなどをフィードバックできるような工夫が必要となってくるだろう。
- 効果が持続された指標と効果の持続がみられなかった指標があったことから、今後のプログラムの内容や手法等と合わせて要因を検討していくことが重要であると考えられる。
- 「野外技能・生活」得点が活動後有意に向上したものの、1ヶ月後には実施前よりも得点が有意に低くなっていたことから、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって上記の力が向上したものの、参加した子どもたちが普段の生活に戻った後は、実施前よりも力が低下してしまったと考えられる。「野外技能・生活」は「ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える」「洗濯機がなくても、手で洗濯できる」の2項目からなっており、この項目が1ヶ月後に低下した理由については、ふくしまキッズ・プログラムの参加コースによっては自炊や洗濯を自分で行う場面もあり、そのようなスキルや技術を発揮する機会があったと考えられるが、普段の生活に戻ってからはそのような機会が減ってしまったため低下したのではないかと推察される。
- 「視野・判断」得点は活動後有意な向上はみられず、1ヶ月後には活動実施前よりも得点が有意に低くなっていたことから、ふくしまキッズ・プログラム参加後も「先を見通して、自分で計画が立てられる」「自分で問題点や課題を見つけることができる」などの力は向上せず、普段の生活に戻ってからも実施前よりも低下してしまったと考えられる。おそらく、ふくしまキッズ・プログラムの運営上こなさなければいけないスケジュールが多く、子どもたち自身に「次に何をしたらよいのか」「今、自分がすべきこと」について時間をかけて考えさせる機会を与えづらい状況にあったのではないかと推察される。したがって、プログラム進行中も、子どもたちには受け身ではなく常に広い視野をもって自分の考えを深める時間を作ったり、自分達で判断させるような場を提供するなどの指導上の工夫も必要であると考えられる。
- 身体的耐性得点においては有意な変化はみられなかったが、他の指標と比べて事前における点数が高いことから、「暑さや寒さに負けない」「とても痛いケガをしても、がまんできる」といった力をもともと備えている集団であったのではないかと考える。本研究から直接因果関係を特定することはできないが、震災による体験が、このような身体的耐性を高めていた可能性も考えられる。

これからの「ふくしまキッズ」のプログラムのあり方を考える

1. 「ふくしまキッズ」の笑顔に隠れているもの

「ふくしまキッズ」に参加する子どもたちの参加者特性は、概ね予想通りの結果であるとはいえ、厳しい状況下に置かれていることが本調査でわかった。子どもたちは皆笑顔でやってきて、笑顔で帰って行くが、震災時に体験してきたことや、帰った先に待っている現実がこうしたストレスがたまる状況であることを我々は決して忘れてはならない。「ふくしまキッズ」の笑顔の下に隠れている過去と現実をどう受け止めていけるか、それが家族にとっても、我々にとっても重要である。

なお一方で、このような厳しい経験と現実の中にあっても、「適応行動（“人の話しをきちんと聞くことができる” “その場にふさわしい行動ができる”）」が備わっていたり、ふくしまキッズでの人との出会いにより「思いやり（“人のために何かをしてあげるのが好きだ” 人の心の痛みがわかる）」などの項目の得点が高まるなど、被災経験を乗り越えて子どもたちが未来に向けてたくましく成長している面をのぞかせていることが本調査でわかったことはうれしいことである。

そして、実施前と終了直後および1ヶ月後の3回にわたる調査により、生きる力・自然への親和性・生命観・環境行動性などが向上することが認められたことから、この子どもたちにとって「ふくしまキッズ」が社会で必要な力を育成するのにかなり効果的なプログラムであったことが本調査で示された。このことは私たちにとって最もうれしいことで、「ふくしまキッズ」の活動は間違いなく価値があると確信できた。

これまでの体験活動に対する多くの研究でもこうした活動が生きる力などにとって有効であることが示されている。しかし、それらの研究対象は一般の児童・生徒であり、活動参加前と参加後から1ヶ月後までの間に自然との関わりがどのようなようであったかや、他の活動への参加経験の有無などがわからないままに調査を行わなければならない、効果が顕著であったとしても、それがそのプログラムの固有の効果なのかどうかについては検討できていないものが多い。

しかし、ふくしまキッズの場合は、外遊び（すなわち自然体験活動）が極端に制限されている日常にある子どもたちが参加者であるため、これらの効果を促しうる体験活動が「ふくしまキッズ」に参加している時だけに限られるとあってよい状況にある。このことから、本調査研究で見られた効果がこれまでの研究と比較して同様の結果を示すとしても、その重みがかなり異なっていると言える。

2. 今後の「ふくしまキッズ」で注意すること

「自然への関心」「自然への親和性」「生命観」「環境行動性」などの自然に対する態度や認識に関する全項目の得点が向上した理由としては、それぞれの受け入れ地域で企画されていたメインプログラムに「自然のなかで自然物に直接触れる体験」を取り入れていることが多かったことが考えられる。これらの活動は「自然のことを教えよう」というよりは「自然の中でゆったり開放感に浸ってほしい」というものだったと推測されるが、それが子どもたちの「自然物と直接主体的に触れあう活動」を促すことになったと考えられる。

また、1週間以上という時間的なゆとりがあったことにも大きな意味があったものと考えられる。そうした活動により自然に対する感性が深まったことが、地元地域に戻ったあとも「自然への関心」

「自然への親和性」「生命観」「環境行動性」が維持されることにつながっていた可能性もある。このことは、自然体験活動が「自然への関心」「自然への親和性」「生命観」「環境行動性」といった自然と共生する社会を構築するために必要なものの見方を獲得することに非常に効果的であるということを示すものとしてたいへん興味深い。

そうした点を踏まえて、これからの「ふくしまキッズ」の活動を考えるとき、福島の子どもたちが抱えている外遊び時間の激減とそれにかかわるストレス状況は、他の地域の子どもたちには見られない特質で、特に、「ストレスを強く感じていたが、慣れてしまったように思う」と回答した保護者が一番多いことに最大限配慮する必要がある。たとえば、外遊びをせずに1～2年を過ごしてしまっている幼児の場合、「外遊びのないことが日常」という状況になりつつあることが懸念され、数年経つと「外遊びできないことにストレスを感じなくなってしまう」ことも想定される。そのため、仮にストレスが軽減されるとしても、外遊びを知らずに育ってしまうことは本調査で示されているような力の育成にとって大きな禍根を残しかねない。

従って、ストレスの解放と外遊び時間の補完という観点から、可能な限り外遊び（またはそれに準ずる発散系の活動）を今後の「ふくしまキッズ」プログラムの中に含むことが必要である。ふくしまキッズ参加中の外遊び時間のデータはないが、どの地域に参加したとしても、毎日数時間は外遊びを行うことの可能な環境にいるはずなのだから、単に「楽しい活動だからこの活動を取り入れる」ということだけでなく、子どもたちにとってよりいっそう意味あるプログラムとするためにも、外遊び・発散系にこだわる必要があるだろう。

3. アフターケアの重要性

生きる力の下位能力である「明朗性」「適応行動」「日常的行動力」などが、活動後有意に向上したが、それは1ヶ月後まで維持されていなかった。また、同じく生きる力の下位能力である「身体的能力」「非依存」「積極性」「自己規制」の得点はプログラム後に有意に向上したが、1ヶ月後にはプログラム実施前に近い状態にまで戻っていた。このことから、ふくしまキッズ・プログラムへの参加によって向上するものの、参加した子どもたちが普段の生活に戻って1ヶ月ほどすると効果が減少するものもあるといえる。

おそらく、プログラムが実施された環境と普段の生活環境が大きく異なることから、これらの能力を活かす場面がなく、思い出さないままに消失していったためと考えられる。従って、活動の効果を持続するためには定期的に体験活動プログラムに参加したり、そのプログラムが終了した後に「実施中のできるようになったことや感じたことなどをフィードバックできるような工夫」が必要となってくるだろう。例えば、受け入れ地域との文通やプログラム時に作成したクラフト、あるいは活動の様子を紹介するブログなどを使って、「どんな活動だったか」「その時どんなふう感じたか」「今度やるとしたらどんなふうやってみたいか」などをふりかえるような時間を持つことが考えられる。こうしたアフターケアが大切だということも今回の調査結果が示している。

福島の子どもを守ろうプログラム 実行委員会

福島本部（福島現地担当）

〒963-8403 福島県東白川郡鮫川村大字赤坂東野字葉貫57番地
NPOあぶくまエヌエスネット内
TEL・FAX 0247-48-2508

実行委員会事務所（窓口業務担当）

〒232-0024 横浜事務所：横浜市南区浦舟町3丁目46
総合福祉施設9階NPO教育支援協会内
電話045-243-6840

<http://fukushima-kids.org> E-mail : info@fukushima-kids.org